

平成 29 年度

東アジア文化創造 NARA クラス 事業報告書

平成 29 年 7 月～12 月

奈良市 文化振興課

東アジア文化創造NARAクラス 1年間の取組み

7月30日（日）はぐくみセンター（奈良市保健所・教育総合センター）
参加者ガイダンス

8月6日（日）平城宮跡資料館

第1回 学びの扉「済州と奈良～ものからみる耽羅と日本の交流」

講師 渡辺 晃宏 氏 （奈良文化財研究所 副所長）

8月16日（水）～19日（土）

済州青少年文化キャンプ（韓国・済州）に大学生・高校生、計10人が参加
美術、写真、音楽をテーマに交流

9月10日（日）東大寺総合文化センター

第2回 学びの扉「寧波と奈良～行き交う人・触れ合う文化」

講師 山川 均 氏 （大和郡山市 教育委員会 生涯学習課主任）

9月24日（日）唐招提寺

特別編 学びの扉「鑑真の心を学ぶ袈裟のお話」

講師 西山 明彦 氏 （唐招提寺長老）

10月15日（日）大安寺獅子吼殿

第3回 学びの扉「東アジアのなかの奈良」

講師 西山 厚 氏 （帝塚山大学教授）

10月21日（土）22日（日）ならまちセンター、大安寺、奈良市埋蔵文化財調査センター

日中韓学生交流プログラム in 奈良「集い、体感、結びの輪」

寧波市、済州特別自治道から大学生や高校生が来寧し、交流を深める

11月3日（金・祝）～5日（日）

寧波青少年交流プログラム（中国・寧波）に大学生・高校生、計10人が参加

水墨画など、現地の文化体験を通じ、寧波の学生と交流

<参加者応募・選考について>

募集期間：平成 29 年 6 月 26 日（月）～7 月 12 日（水）

【選考結果】

応募 57 人（男 7 人、女 50 人）

当選 41 人（男 2 人、女 39 人）

落選 16 人（男 5 人、女 11 人）

（人）

結果		高校生	大学生	その他	合計
当選	济州渡航プログラム	5 (男 0 女 5)	5 (男 0 女 5)	0	10 (男 0 女 10)
	寧波渡航プログラム	5 (男 0 女 5)	5 (男 1 女 5)	0	10 (男 1 女 10)
	国内実施プログラムのみ	8 (男 0 女 8)	12 (男 1 女 11)	1 (男 0 女 1)	21 (男 1 女 20)
	小計	18 (男 0 女 18)	22 (男 2 女 20)	1 (男 0 女 1)	41 (男 2 女 39)
落選		5 (男 0 女 5)	11 (男 5 女 6)	0	16 (男 5 女 11)
応募者合計		23 (男 0 女 23)	33 (男 7 女 26)	1 (男 0 女 1)	57 (男 7 女 50)

※当選通知後からプログラム開催中までに 10 人の参加辞退者あり

<参加者ガイダンス>

日 時：平成 29 年 7 月 30 日（日）10:00～11:00

場 所：はぐくみセンター（奈良市保健所・教育総合センター）3 階大会議室

内 容：事務局よりプログラムの説明を行った。

その後、グループワークを行い、中韓の若者たちとどのような企画で交流したいかを話し合ってもらった。



国内プログラム

事業名：東アジア文化創造NARAクラス 東アジア学びの扉（第1回）

日 時：平成 29 年 8 月 6 日（日） 13:00～16:00

場 所：平城宮跡資料館 小講座室

講 師：渡辺 晃宏 氏（奈良文化財研究所副所長）

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 27 人

内 容：

講師の渡辺晃宏氏は 2016 年の「東アジア文化都市 2016 済州」クロージングにあわせて開催された「人文学コンサート」においても、韓国・済州にてご講演いただいた。

今回のプログラムでは、奈良時代から奈良と済州につながりがあったことを、平城京から発掘された「木簡」をもとにお話いただいた。

また、今回は特別に、木簡の実物を見学させていただいた。木簡には調（律令制下の租税）として「耽羅鰩」が納められたという記述があった。「耽羅」は済州の旧国名で「鰩」は済州名物のアワビのことである。実際に済州で獲れたアワビが納められたというわけではなさそうであるが、「耽羅」という地がアワビの名産地であることが日本でも広く知られていたことがうかがえた。

東アジア文化創造 NARA クラス参加者にとっては、1300 年も前の奈良と済州との交流の物語を感じることができ、今後で済州の人々と交流をもつにあたり、大変刺激を受ける内容であった。

その後、渡辺先生の案内と解説で資料館の見学を行った。平城宮跡の成り立ちをはじめ展示物に関して詳しいお話を頂戴でき、参加者にとって、奈良を学ぶいい機会となった。



事業名：東アジア文化創造NARAクラス 東アジア学びの扉（第2回）

日 時：平成 29 年 9 月 10 日（日） 13:00～16:00

場 所：東大寺総合文化センター 会議室A

講 師：山川 均 氏（大和郡山市教育委員会）

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 12 人

内 容：

山川均氏は、日本や中国の石造物の歴史について研究されており、本プログラムでは、石工技術という視点から中世日本と中国の交流についてお話いただいた。

また、鎌倉時代、東大寺復興に携わった重源上人が中国・寧波の阿育王寺に滞在していたお話や、東大寺南大門の石獅子や法華堂にある石灯籠、これらが寧波からやってきた石工が造ったものというお話など、当時、奈良と寧波は様々な形の交流があったことのお話があった。

お話の後は、参加者全員で境内を歩き、石獅子や石灯籠を実際に見学した。何気なく目にしていたものが、実は交流の物語を現代に伝える貴重な資料であったことに、参加者も驚いていた。

今回の参加者の中には、今後、寧波でのプログラムに派遣される予定の人もあり、現地の人が驚くぐらい、寧波の歴史について詳しくなってもらえたらと思う。



事業名：東アジア文化創造NARAクラス 東アジア学びの扉（第3回）

日 時：平成 29 年 10 月 15 日（日） 13:00～15:30

場 所：大安寺獅子吼殿

講 師：西山 厚 氏（帝塚山大学教授）

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 14 人 一般参加者 44 人

大安寺 河野良文貫主 向井副市長

内 容：

今回はNARAクラス参加の学生だけでなく、一般の方もご参加いただき、日頃のNARAクラスの活動を紹介する場にもなった。

講座に先立ち、大安寺の河野良文貫主からご挨拶をいただいた。大安寺はかつて壮大な伽藍をもつ大寺院であったこと、そして国際交流の拠点であったことを教えていただいた。

西山先生からは東アジアの共通文化である仏教を中心にお話をいただいた。仏教伝来以降、多くの人々が日中韓を行き来し、お互いに影響を与え合った。鑑真和尚のお話をはじめ、大安寺を完成させた僧・道慈や、新羅の僧・義湘や元曉など、様々な僧にまつわるエピソードや、文化の多様性を認め合うことの大切さについて紹介いただき、NARAクラスの学生も引き込まれるようにお話を聞いていた。

また最後に、先生から国際交流に取り組む学生たちへ、お互いの違いを大切に、敬意を持って知り合うということが大切とアドバイスもいただいた。

その後、8月に韓国で行われた済州青少年文化キャンプの活動報告を、NARAクラスの参加者から行った。たくさんの人の前で発表者には少し緊張が見られたが、現地での写真を見てもらいながら、しっかりとした発表をしていただけた。



事業名：東アジア文化創造NARAクラス 東アジア学びの扉（特別編）

日 時：平成 29 年 9 月 24 日（日） 13:00～15:30

場 所：唐招提寺 僧坊

講 師：西山 明彦 氏（唐招提寺長老）

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 12 人 一般参加者 3 人

内 容：

■ 講座「鑑真の心を学ぶ袈裟のお話」

奈良時代、戒律を伝えるため、危険な航海を乗り越え、日本に渡った鑑真和上。渡日を決心したのは、日本より贈られた 1,000 枚の袈裟に縫い取られた長屋王が作った漢詩がきっかけとも言われている。

西山長老からは鑑真和上がなぜ日本に来られたか、さらにどのような教えがあったのかなど、お話を頂いた。専門的な用語もあったが、パワーポイントでビジュアルを多用していただくなど、分かりやすくなるよう工夫いただいた。

また唐招提寺では長屋王の故事に習い、鑑真和上が渡日する前に住職であった揚州・大明寺に 200 枚の袈裟を贈るプロジェクトを実施していると説明があった。

■ 袈裟を縫うワークショップ

講座に引き続き、実際に中国へ贈る袈裟に針を入れるワークショップが行われた。

袈裟づくりをお手伝いされているという方に指導いただき、参加者全員が作業に参加することができた。一人ずつ針と糸で袈裟に麻布を縫い付けていった。袈裟には次のような漢詩が刺繍されていた。

「山川異域 風月同天 寄諸仏子 共結来縁」（山川域を異にすれども、風月天を同じくす。諸々の仏子に寄せて、共に来縁を結ばん）

この漢詩は、長屋王が袈裟を贈ったときにも縫い取られていたもので、日本と中国を結びつけた詩が今なお大事にされていることに、参加者は感心していた。



事業名：東アジア文化創造NARAクラス

日中韓学生交流プログラム in 奈良「集い、体感、結びの輪」

日 時：平成 29 年 10 月 21 日（土）9:20～18:30

10 月 22 日（日）9:00～18:30

場 所：10 月 21 日 ならまちセンター、ならまち一帯、東大寺、唐招提寺、薬師寺

10 月 22 日 大安寺、奈良市埋蔵文化財調査センター

参加者：東アジア文化創造NARAクラス 24 人 寧波参加者 10 人 済州参加者 12 人

内 容：

10 月 21 日・22 日に、中国・寧波市と韓国・済州特別自治道から大学生や高校生 22 人が奈良を訪れ、NARA クラス参加者と様々なプログラムを通じ交流を深める日中韓学生交流プログラム in 奈良「集い、体感、結びの輪」を開催した。

21 日の午前中は、ならまちセンターを拠点にならまちを散策するフィールドワークを行った。参加者が 5 つのグループに分かれ、それぞれに配られた写真が並ぶワークシートを見ながら、記されたわずかなヒントをもとに、その写真の場所を見つけ出し、グループで記念撮影をするというワークを行った。雨天であったため、屋外のワークは困難であったが、ワークを通じてコミュニケーションを取り合い、次第に仲良くなっているようであった。

午後は東大寺、薬師寺、唐招提寺のうちひとつを訪れ、日中韓の共通点や相違点を見つけようというフィールドワークを行った。現地からならまちセンターに帰ってきた後は、各グループから 1 日の成果を発表してもらった。発表では、パワーポイントを活用し、発表の準備を各グループにて行った。日本人だけならそんなに難しくない作業を、言葉が通じにくいなかで進めていくことに困難を感じていたようであった。しかし、1 日を共に過ごした各グループは英語や翻訳アプリなどを使いながら、積極的な意思疎通をみることができた。中韓参加者は鹿がいることに興味が多く、また寺院の様相について違いがあることに興味を持った者が多かった。

翌 22 日は、残念ながら悪天候のため予定を大幅に変更し、屋内で安全に行えるプログラムのみを実施した。書のワークショップや切り絵ワークショップ、奈良市埋蔵文化財調査センターで行った拓本体験など、日本の文化を皆で体験し、よりいっそう仲は深まった。

予定していた夕食会は残念ながら中止になったため、プログラム最後に各都市の代表者から 2 日間の感想をもらい解散となった。限られた時間の中で参加者たちは存分に国際交流を楽しみ、今後の交流を約束した。



中国・韓国プログラム

事業名：日中韓青少年文化キャンプ（韓国・済州）

日 時：平成 29 年 8 月 16 日（水）～19 日（土）

場 所：韓国・済州特別自治道 各所

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 10人（引率2人、添乗員1人、通訳2人）

内 容：

奈良の学生たち10人が済州で開催された3都市による交流プログラムに参加した。

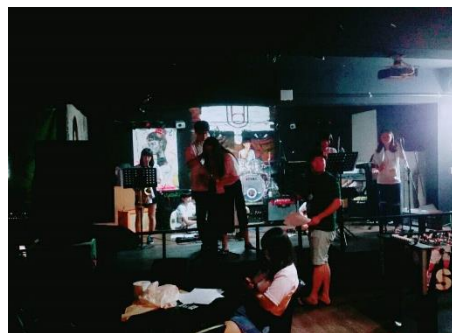
本プログラムでは、「音楽」「美術」「写真」の3つのテーマにて行われ、参加者もそれぞれいずれかのテーマを選択し、グループに分かれて交流プログラムに参加した。

交流最終日となる18日には、海岸の特設ステージでそれぞれの成果を発表する機会があり、各グループはそれに向けて制作や練習を重ねた。

音楽グループは指導者のもとで3都市それぞれの発表と、3都市合奏を練習し、本番で披露した。美術グループは人体で型をとり海女人形を作成し、また大型絵画を作成し、ステージに装飾として設営した。また写真グループはライトペインティングと言われる手法による写真を撮影し、同じくステージにおいて参加者に披露された。

グループワーク以外においては、海女博物館や漁村体験など済州ならではの場所を訪れ、また「海の話セミナー」としてドキュメンタリー映画の監督などによる話を聞くなど、大変充実した内容であった。

全プログラム終了後には、全員に修了証が渡され、参加者にとっていい記念品となった。各都市の参加者が連絡先を交換するなど、今後、各自において交流が期待できるものとなった。



事業名：寧波青少年交流プログラム（中国・寧波）

日 時：平成 29 年 11 月 3 日（金・祝）～5 日（日）

場 所：中国・寧波市 各所

出席者：東アジア文化創造NARAクラス 10 人（引率 3 人、添乗員 1 人、通訳 1 人）

内 容：

奈良の学生たち 10 人が寧波で開催された日中の交流プログラムに参加した。

本プログラムでは、寧波の歴史や文化に触れ、それまでに東アジア学びの扉などで知識として得たものを体験という形に昇華することを目的に参加した。

現地では、寧波を代表する寺院である天童寺と阿育王寺に訪れ、僧侶にご案内いただき、寺院内を見学した。奈良の寺院とは違った建築様式や仏像などを見て、参加者には驚きがあった。

また、水墨画や中国結びの体験を、現地の学生たちとともにに行った。奈良での交流プログラムに参加した中国の学生もおり、互いに再会を喜び、友情を深めることができた。

祝日と土日を利用したため、2泊3日という短い日程であったが、それぞれの自分の持っている文化との違いを感じることができた。違いを知るということは、異なる文化を理解する第一歩であり、参加者にとって、貴重な経験になったと思われる。



成果報告

事業名：東アジア文化創造N A R Aクラス 成果報告会

日 時：平成 29 年 12 月 16 日（土）10:30～14:00

場 所：ならまちセンター会議室 3・4

出席者：東アジア文化創造N A R Aクラス 9 人

内 容：

日中韓各都市での全プログラムが終了したことをうけ、参加者同士がそれぞれの経験を共有し、今後の国際交流へのモチベーション向上につなげるため、成果報告会を実施した。

当日は、参加者それぞれが、日中韓各プログラムで最も印象に残ったものについて発表した。中国や韓国の人たちと触れ合っ感じたことを話してくれたが、言葉の壁を越えて友達になれたことが、なにより嬉しかったようである。

また、寧波や済州に行った人は、各都市の文化を体験し、各国の共通点や相違点を肌で感じることができ、メディアなどの情報だけではなく、実際に現地を訪れ現地の人と触れ合うということが大切だと発表してくれた。

午後からは、自分たちの交流活動をまとめたパネルの作成を行った。写真を見ながら、その時のことを思い出してもらい、交流のなかで感じたことをパネルに書き入れてもらった。

出来上がったパネルは、平成 30 年 1 月 9 日（火）から 12 日（金）まで奈良市役所の玄関ホールにて展示した。



<活動レポート展示：平成30年1月9日（火）～12日（金）市役所玄関ホール>



参加者の声

日中韓学生交流プログラム in 奈良 感想

奈良の参加者

中韓の人から、「建物や寺院で使われている文様など見たことがある！」というコメントがありました。シルクロードでつながっていた証が今も残っていることに驚きとうれしさを感じました。

初めて会う、異なる文化の人と一緒に行動するなかで、自分の意見を言い、相手の意見を聞き、1つのことについて話し合うという経験をしました。これから、大学の授業、社会生活で、こういったことが必要になる場面はたくさんあると思います。その時に、今回の経験をいかして、課題に向き合っていきたいと思います。

寧波の参加者

最初はちょっと緊張していましたが、皆さんの笑顔を見てすぐ落ち着きました。奈良の学生は優しく、グループ活動をしていた時に、ずっと私たちの世話をしていました。分からないことも丁寧に教えてくれました。皆は違う国から来て、それぞれ違う性格を持っていますが、うまくコミュニケーションが取れました。

楽しい時間を過ごすことができるとっても嬉しかったです。二日間が短かったですが、みなさんの笑顔はずっと頭に残っています。今回は本当に一生忘れられない思い出になりました。私たちの友情が永遠に続くことを願っています。

済州の参加者

歴史や文化も大切ですが、最も大切なのはその中にいる「人」だと思います。今回の交流を通じて文化や言葉は違っても同じ「人」だという気持ちで向き合えと思いました。

日中韓は文化も歴史も言葉も違うが、私たちは同じものを見たり聞いたりして、ともに喜び、悲しみ、多くを共有できます。このような3国の多文化の中で過去の歴史がどうあれ、ともに明るい未来に向かって歩んで行けると 생각합니다。

成果と課題について

<成果>

- 「東アジア学びの扉」においては、各回とも質の高い講座を行っていただけた。参加者には考古学を専攻している学生もあり、自らの専門課程においても非常に有意義であったという意見をもらえた。
また、平城宮跡歴史資料館や東大寺など、フィールドワークを行ったため、単なる講座でなく体験を伴うプログラムになり、より参加者の理解が深まったと考える。
- 中国や韓国に旅行に行ったことがある参加者もいたが、学生にとって中韓の人と交流できる機会はそれほど多くない。同世代の人と交流するとなると留学などの方法になりハードルが高くなる。本事業によって、同世代の人と交流の場を持てたことは参加者にとって貴重な機会であり、今後の国際交流への意識を高めることができたと思う。
- 過去の東アジア文化都市に参加し、寧波や済州へ渡航した方にも、東アジア学びの扉や日中韓交流で講師をお願いした。参加者は、東アジアでの文化交流に参加経験がある人の話を聞くことができ、「東アジア文化都市」後継事業としての連続性を持たせることができた。

<課題>

- 荒天のため日中韓学生交流プログラムについて大幅に変更があった。中韓を招待しており、参加者にとっては一度きりの交流となるため、天候に左右されにくいプログラムを検討していく必要がある。
- 東アジア学びの扉では、専門性が高い講座を行っていただけた。しかし一方で、基礎的な知識を得る機会が少なく、高校生や歴史学・考古学等を専攻していない大学生にとっては些か難解であったと思われる。導入として入門的な講座を設定したうえで、専門性の高い企画へつなげるなどの工夫が必要である。
- 「東アジア学びの扉」と「日中韓学生交流プログラム」、「中韓開催プログラム」の内容に一貫性が見つけにくいと感じられた。中韓開催については、各都市の企画意図もあり、内容の一貫性は取りづらいが、今後は、国内プログラムのテーマを定め、各都市に最適なプログラムを紹介又は企画してもらうようにすべきである。

